

ロシア語と日本語における数詞の比較

鈴木 理奈

1. はじめに

数詞とは数量や順序を表す語である。日本のロシア語教育の場において、数詞は初級教科書の最後の方に扱われ、十分な学習時間が設けられないことも多いという問題が見受けられる。しかし数詞は、金額、日付、容量など日常生活の中で使用する機会が実際には多く、その学習は大変重要であるといえる。

ロシア語と日本語における数詞の性質の違いに注目してみると、ロシア語における数詞は、個数詞、順序数詞、集合数詞などに分類され、数量単位や名詞などの語と結合する際には格変化を伴うなど、さらに複雑な性質を示す。日本語においては個数詞のみで順序数詞や集合数詞のようなものはなく、順序を示す際には個数詞の後に「番目」の助数詞を伴い表現されるなど、ロシア語と日本語ではいくらかの異なりがある。また数量表現は、具体的な数値を示す様々な種類の数詞(*десять* 10, *десятый* 10番目の)を用いる形だけでなく、明確な数値を示さない不定数詞(*много* 多い、*мало* 少ない)による形などもある。本稿では、個数詞を用いたロシア語と日本語における数量表現の違いを見ていきたい。

2. 個数詞の性質

個数詞とは、1、2、3……のように、事物の数量を表す語である。ロシア語の個数詞は独特で、1つの数詞に対して文法的な複数の形を持つものも存在する。ロシア語には文法的な性・数があり、数詞の1は男性・女性・中性・複数の形、数詞の2は、男性/中性・女性の形を持つ。その使い分けは、数詞の後にどのような性・数の語が置かれるかによって変わる。そのため、数詞は後置する名詞に揃えて同じ性・数の形をとる。なお、ロシア語の数量表現では、数詞の1は省略して記載されないこともあるが、本稿では明確な例文分析のため、すべて表記し考察を行う。

例：*один чемодан* (1個のスーツケース)、*одна сумка* (1個のかばん)、

одно дерево (1本の木)、*одни часы* (1個の時計)

また、ロシア語の場合は格変化があるため、数量表現においても格変化の影響を受け、数詞に後置する数量単位や名詞の語の形が変わり、数詞1の後は主格単数/複数、2～4の後は生格単数、5以上の後は生格複数となる。

例：*два чемодана* (2個のスーツケース)、*две сумки* (2個のかばん)

пять чемоданов (5個のスーツケース)、*пять сумок* (5個のかばん)

性・数・格に関わるこのような概念は、ロシア語の数量表現全般に共通するものといえる。ただし例外として、不変化の名詞については、性・数・格による影響を受けない。

一方、日本語においては、ロシア語のように性・数・格による変化はなく、数詞の文法的な形態は1つである。しかし、日本語の数詞には、ひとつ(ひ)、ふたつ(ふ)、みつつ(み)……のような和語の数詞、いち、に、さん……のような漢語の数詞、と2つの系列が存在する。

例：1口(ひとくち)、1台(いちだい)

また、日本語の数詞の読み方は、音声と文字の関連性が表記には反映されないため、日本語学習者にとって分かりづらい部分もあるようだ。

3. 数量詞の形成

数詞は数を表す語に対し、数量詞は数量を示す語句になる。数詞は、重さや長さなどをはかる数量単位や、普通名詞との結合によって数量詞を形成し、事物の数や量を示すことができる。

例：*один час*(1時)、*один студент*(1人の学生)

より精密な数量を示す表現となるのは、数詞と数量単位の結合による形である。数詞と数量単位の構成による数量詞は、ロシア語、日本語ともに同じ要素の語および語順の形をとるという点で大きな違いはない。しかし、前述の通り、ロシア語の場合は性・数・格があるため、数詞の1、2～4、5以上によって後置する数量単位の語が格変化し、数詞に後置する数量単位の語が男性・女性・中性・複数のいずれかによって数詞1と2はとる形が変わる。

例：*один рубль*(1ルーブル)、*два рубля*(2ルーブル)、*пять рублей*(5ルーブル)、*одна минута*(1分)、*две минуты*(2分)、*пять минут*(5分)

ロシア語にはいわゆる日本語の助数詞にあたる語はないため、ロシア語の表現では単

に数詞と名詞の結合となる。その際に語順は、数詞＋名詞の形をとるが、ロシア語では語間に「の」にあたるような助詞は入らない。

例： *один журнал*(1冊の雑誌)、 *два журнала*(2冊の雑誌)、 *пять журналов*(5冊の雑誌)、 *одна книга*(1冊の本)、 *две книги*(2冊の本)、 *пять книг*(5冊の本)

ロシア語においても数量单位的な用いられ方をする名詞はいくつかあり、*штука*(個)、*человек*(人)、*пакет*(袋)などがあげられる。これらの名詞は、数詞の後に置かれ、語順は上述の数量詞と同様に、数詞＋名詞の形となる。

例： *одна штука*(1個)、 *два человека*(2人)

この数量单位的な語は、さらに後置に名詞を生格形で伴い、数詞＋名詞＋名詞の形で、具体的に何がどのくらいと数量を示す表現も可能である。ただし、*человек*などの語のように、一般的に同様の表現で用いられないものもある。

例： *один пакет молока*(牛乳1パック)

数量を示す対象物となる名詞は、限定された1つの数量单位的な名詞との結合に留まるのではなく、何を表すかにより異なる複数の数量单位的な語と結合することもありえる。

例： *три бутылки сока*(3本のジュース)、 *три пакета сока*(3パックのジュース)

また、数量单位的な語の中でも *штука*(個)などは、数量詞に加わるパターンの数詞＋名詞＋名詞の形と、加わらないパターンの数詞＋名詞の形の、いずれもありえるもので表現のバリエーションを可能とする。

例： *пять штук яиц*(5個の卵)、 *пять яиц*(5個の卵)

一方、日本語における数量表現の視点から見ると、数詞と数量単位との結合による数量詞は、ロシア語と同様に数詞＋数量単位の語順となり、語間に助詞なども入らない。しかし、日本語には格変化がないため、いかなる数詞の後置にくる数量単位の語の形は変わらない。

例： 1キロ(*один килограмм*)、 3キロ(*три килограмма*)

日本語には物の種類を示す助数詞が存在し、数詞と助数詞の結合の形による多様な数量表現がある。助数詞は、細長い物は「本」、平たい物は「枚」など、どのような物を表すかにより用いられる語が異なる。このような概念はロシア語にはないものである。

例： 1本のペン(*одна ручка*)、 2通の手紙(*два письма*)、 3冊のノート(*три тетради*)、

5 枚の皿(*пять тарелок*)

ただし、その対象物が分類的に同種でも、用いられる助数詞の語が異なることがある。特に動物を数える際には、大きいか、小さいか、何類か、などによっても助数詞の語が変わり、人間から見た動物との関係性や位置付けがはかれるものである。

例：2 頭のゾウ(*два слона*)、2 匹の犬(*две собаки*)、2 羽のウサギ(*два зайца*)

また、数量を示す対象物である名詞との結合では、同じ物でもどのように数えるかにより、「1 切れ」または「1 斤」など、用いられる助数詞の語は異なる。

例：1 切れのパン(*один кусок хлеба*)、1 斤のパン(*одна буханка хлеба*)

日本語には助数詞を伴う数量詞は大きく 2 つの語形があり、数詞+助数詞+助詞「の」+名詞による数詞が始めにくる形と、名詞+数詞+助数詞による名詞が始めにくる形を可能とする。これに対応するロシア語の表現は、数詞+名詞の形もしくは数詞の後置に数量単位的な名詞を付加した数詞+名詞+名詞の形となるが、いずれにしても同じ品詞および語順の構成をとり、日本語のように同義的表現で異なる品詞語順になるというわけではない。

例：5 冊の教科書(*пять учебников*)、教科書 5 冊(*пять учебников*)

2 杯のコーヒー(*две чашки кофе*)、コーヒー 2 杯(*две чашки кофе*)

日本語の数量詞における数詞+助数詞+助詞「の」+名詞の形は、ロシア語の数量詞における数詞+名詞、またはそれに数量単位的な名詞を付加した形と、基本的に語順は大きく変わらず、相違点は日本語の数量詞で助数詞および助詞「の」が加わるということである。しかし、日本語の数量詞における名詞+数詞+助数詞の形については、ロシア語の表現と大きく異なるもので、相応するロシア語の数量詞では始めに数詞があり、日本語のように名詞がくることは通常ない。ロシア語の数量詞の語形を見ると、数詞の後ろに対象物となる名詞が生格形で置かれ、*пять учебников* “教科書 (の) 5 冊”、*две чашки кофе* “コーヒー (の) 2 杯” というような形式がとられており、これは日本語の数量詞における名詞+数詞+助数詞の形に近いといえるかもしれない。ロシア語の数量表現においては、あくまでも数詞が主となる存在で強調され、対象物となる名詞は付随的な役割でしかない。それに対して、日本語の数量詞における数詞+助数詞+助詞「の」+名詞の形による表現は、“教科書” や “コーヒー” のような名詞が主で、そこに数量的な性質付けがされるという構図にも捉えられる。

4. おわりに

ロシア語と日本語において、数量詞を構成する要素や語順は、それぞれの言語的性質により違いが見られる。

ロシア語における数量詞の構成要素は、数詞と数量単位または数量を示す対象物となる名詞となる。ただし、数詞と数量単位または名詞の羅列で数量詞が形成されるのではなく、数詞に後置する数量単位や名詞の語が格変化し、さらに数詞1は性・数を、数詞2は性を持つため、後置の語も性・数・格をあわせるという、文法的な規則がはたらく。また、ロシア語の数量詞においては、数詞が主格で始めに置かれ、数量単位や対象物となる名詞は斜格で数詞に後置し、文法的な形を見ても数詞が主となる表現をとっている。

日本語における数量詞の構成要素には、数詞と数量単位または数量を示す対象物となる名詞のほか、助数詞や助詞が加わることがある。なお、日本語には格変化がないため、数量詞の形成で各々の語に変化は生じない。数詞と数量単位の結合による数量詞は語順通りの列記になるが、助数詞を伴う数詞と名詞の結合による数量詞は、数詞だけでなく名詞を前置とする語順も可能となり、数詞が前置の場合は、さらに助詞「の」を伴う形となる。

このように、ロシア語における文法的な性・数・格、日本語における助数詞や助詞の付加など、数量詞の形態に生じる異なりは、いずれも互いの言語に持たない特性によるものである。

